

〔研究ノート〕

日本における越窯青磁の出土と受容について

淡い青緑色の豊かな美しさを持つ越窯青磁は、日本にも数多くたらされ、日本の緑釉陶器の発達に大きな影響を与えました。越窯青磁は、日本の九州から東北地方から出土し、日本各地に流通していました。日中の交流の中で受容された越窯青磁について、出土地と史料から考察します。

日本で出土した越窯青磁は唐から北宋(9-11世紀)が多くを占め、主な出土地は外国からの使節や商人の玄関口であった福岡・鴻臚館址のほか、奈良・平城京址、京都・平安京址、及び京都や奈良の主要な寺院に比較集中しています。

鴻臚館址遺跡からは破片を含めて大量の越窯青磁が出土しています。少数ながら陰刻文様が施された破片もあり、中国国内の窯址で墳墓からの出土品に類例が認められますが、大多数の碗や皿は器の内外に目跡が残る大量生産品です。これに対し、寺院の境内や寺院址では出土数は極めて少ないものの、水注や合子、香炉など器種が多様で、質の高い作例が見られます。例えば、京都府宇治市浄妙寺跡出土の伝来がある水注(五代～北宋、10世紀 京都国立博物館)や、奈良・東大寺や薬師寺など主要な寺院から出土した水注や碗、透し彫り香炉の蓋の一部などです。奈良県出土の蓮葉文が線刻された皿の一部(図1)は、上林湖窯址出土の皿(図2)などに類品を見出せます。

奈良県や京都府で比較的高い越窯青磁が出土している理由は、これらの地が当時の都であり、また中国と交流を持つ大きな寺院があったためであることがこれまでに指摘されています。越窯青磁の受容は一部の貴族や僧侶に限られていたと考えられますが、平城京や平安京には唐人や新羅人も居住しており、個人同士で行われる贈答によって越窯青磁がもたらされることもありました。

次の史料には、越窯青磁を指す、またはその可能性が高い記述が認められます(太字は青磁、付線は関連部分。共に筆者による。)

①「唐人書簡」『高野雑筆集』巻下(重要文化財 承安元年[1171] 大谷大学博物館所蔵本)(注)・849年「閏十一月廿四日唐客徐公祐和尚／空和尚[法前]／謹奉白茶埵五口・越埵十五対・青瓶

子一・銅匙筋三対、伏惟鮮幸甚謹言」

・852年以前「九月十一日 唐客徐公祐状上／義空大德[法前□□]家兄具有書信由和尚到京日、伏望検視茶一斤・白茶碗十口公祐謹献上伏惟不責輕鮮 謹言」

②867年 東寺所蔵『安祥寺伽藍縁起資材帳』※[]内は『平安遺文』1-164の表記。[]内は割注。

「西影堂什物／薰鉢一口 白銅沙甘・子一口／同小水瓶一口 同剃刀一口／剪刀一口 灑水囊一口[白銅]／右三種、着前大箱一合／白瓷茶瓶子一口 同茶埵二口／大唐笠子一蓋 唧唼杖子一支／稠桑紫石硯瓦一口 點硯水瓶子一口／鹿尾拂子一支 黄楊子繩床一脚／青瓷薰呂一合 金剛子数珠一貫／榎木經台一基 黄楊木養和槌一支」

「僧房具／佛台額搭布八端 純幕二具[表紺、裏緋]／幔四條[各長二丈八尺四寸。高七尺□寸。各表裏以緋紺純]／斑布大幕□條[五幅]／純薫帳一條[四幅長六尺]／麻布垣四條 換染合帳一條／純搭薫帳二條 秤二柄[白銅鉤盤]／鉄燈擎子一基 大唐研鉢三口／大唐瓷[瓶]十四口[白二、青十二]／直拔壇八口 同花盤二口[大]／茶埵六十一口 白瓷盤十四口／唾囊二口[白一、青一] 薫爐五合／錫杖五支[白銅] 白檀香一支[本経七寸五分、末経五寸五分、長三尺五寸]／白芥子大三斤[十四兩] 頗胝迦麥三顆／琵琶一顆[重六斤九兩] 慈石二果[大一斤四兩]／土碌大一斤 石碌大一斤／曾青大四兩 鸛虱大五兩／消石大二十三兩 銅青[着瓷瓶]／訥砂大二兩[入瓷]」

③931年『仁和寺御物実録』(天曆四年[950年]成立)

「青茶埵提壺 壺口／白茶埵蓮華形壺 壺口[加蓋]／白茶埵小壺式口／白瑠璃壺 壺口[加黑柿蓋并盤]／紺瑠璃小壺 壺口／銀小尼瓶 壺口[大六兩三分、有木母]／以上納黒漆草宮一合」

「篋し御厨子 壺基[鏤子同上]／(中略)青茶埵御硯 壺口／(中略)青瓷埵 壺口／(中略)青茶埵 壺口[加通毛子]／以上納淺香宮一合[有白銀置口]／銀鉢子壺口[大九兩]／同蓋壺口[大六兩三分]／青茶埵 壺口[加黒漆毛子]／以上納岐佐木宮一合[有羅□□]

／高松茶研 壺具／鉄鉢子 壺口／時絵茶筒 壺口／金銅茶散 壺枚／鉄し 壺枚／青茶埵 壺口[加朱漆毛子]／以上納岐佐木宮一合[有白銀置口]」

「白木調韓櫃壺合[二枚各入]／(中略)青瓷鉢壺口[有輪]／赤銅尼瓶壺口[有蓋]／白銅人形水瓶壺口／新羅鶏頭瓶壺口／青茶埵水瓶式口／同汲瓶壺口／青瓷尼瓶壺口／黒漆木瓶壺口／同木節模壺口／同尼瓶壺口／白茶埵唾壺壺口」

④951年『史部王記』「天曆五年六月／九日、御膳沈香折敷四枚、瓶用秘色[花鳥余情、卷第四、末摘花]」

①は、唐商人の弟で唐客の徐公祐が日本に居住する唐僧義空に送った手紙。徐公祐の兄で唐商人の徐公直は息子を義空に預けており、兄弟は度々贈り物をしています。ここでは「越埵十五対」が白磁碗や茶と共に義空に贈られています。義空は嵯峨天皇の皇后である橘嘉智子の意を受けた入唐僧の恵運の仲介で来日、京都・東寺西院に居住後、橘嘉智子が創建した檀林寺に移ったとされる人物です。

②は、入唐僧の恵運(798-869)が安祥寺の伽藍や什物などについて詳細に記したもの。安祥寺は文德天皇の母である藤原順子が発願、恵運が開基となり、嘉祥元年(848)に京都に開創されます。この中には、僧房具として「大唐瓷[瓶]十四口[白二、青十二]」や「茶埵六十一口、白瓷盤十四口」などが挙げられます。唐から請求したと考えられる陶磁器十四口の内、青磁は十二口で、その他に制作地は不明ですが茶碗六十口もあります。恵運ら入唐僧は明州から出航して帰国しており、青い「大唐瓷[瓶]」が越窯青磁である可能性は高いでしょう。

③には、931年に宇多天皇(在位887-897)が京都・仁和寺の宝蔵に納入した品物が記されます。「青茶碗」「白茶碗」「青瓷」が多く見られ、越窯青磁も含まれていたと考えられますが、「青茶埵」「青瓷」が中国の青磁か、日本で焼造された緑釉陶器を指すかは判然としません。「青茶埵御硯」から、「青茶埵」は青い陶磁器を意味するようです。

④は醍醐天皇の第四皇子である重明親王(906-954)の日記。朝

廷の儀式について記録され、951年に天皇に供する忌火の御膳に「秘色」の瓶が用いられています。越窯青磁の美称「秘色」が日本へ伝来したことを示す資料として知られます。

史料に記された越窯青磁は、宮廷では寺院への奉納品として、または儀式などの場で用いられ、日本での出土傾向とも合致します。②～④の公的な場における事例に対し、①は私的な交流で越窯青磁がもたらされ、このような事例は実際には多く行われていたと考えられます。

史料に確認される陶磁器の器種は、白磁も含めて茶碗が多く、僧侶が受容する主な目的のために茶及び茶碗がもたらされていたことがわかります。日本・中国僧侶の交流は主に唐～宋の商人・商客を通して行われたため、彼らの結びつきも深く、中国僧・商人から日本僧への贈り物には茶関係(茶、茶碗など)が比較的多く、中国商人から日本に滞在する中国僧へ茶や越窯青磁碗が贈られることもあったようです。日本へ訪れる主な中国商人は明州や福州を中心とした江南出身者が多く、越窯青磁の日本への請来は交通路と密接に関係していたといえます。これらの運搬を担っていた人々の私的な交流の中で行われた越窯青磁の授受も、日本における越窯青磁受容の特性を明らかにする重要な要素といえます。

(本稿は2017年9月に中国浙江省上虞市で開催された『越窯青瓷国際学術研討会』で行った中国語発表の内容です。図2は慈溪市博物館編『古陶瓷学術研究基金叢書 上林湖越窯』科学出版社、2002年より転載、一部付け加えました。芸芸部 瀧朝子)

注 大谷大学博物館HPデジタルデータ。田中史生「唐人の対日交易―『高野雑筆集』下巻所収「唐人書簡」の分析から―」『経済系』第229集、関東学院大学、2006年9月。大槻暢子「唐僧義空についての初歩的考察―唐商徐公祐から義空への書簡―」『東アジア文化交渉研究』第1号、関西大学文化交渉学研究拠点、2008年3月。

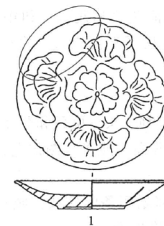


図2 上林湖窯址出土
唐中期



図1 筆者描き起こし
奈良文化財研究所